

翻訳

## ハ・サンボク著『死者の政治学』所収 プロローグ 「国立墓地と死者の政治」

“National Cemetery and Politics of the Dead” by HA Sangbok, Prologue,  
in *Politics of the Dead*, Motive Book Ltd., 2014, 1-10

金世徳\*

KIM Saeduk

Observe the national cemeteries and the politics of the dead that Korea is experiencing. I would like to grasp the Korean experience in terms of its historical specificity and particularity as well as its anthropological and modern national generalities. We call this approach "Comparative Politics of the Dead. This paper will ultimately project the birth of Korea's national cemeteries in order to understand the universality and particularity of Korea's national cemeteries.

キーワード：国立墓地(National Cemetery)、死者の政治(Politics of the Dead)、国立顕忠院(Seoul National Cemetery)

### 1. 解題

『死者の政治学』は、2014年に韓国のモチーフブックから出版されたハ・サンボクの著書である。同書が目にしたのは、「生きている政治空間」としての国立墓地であった。本稿では、同書の第1章 国立墓地と死者の政治(1-10頁)の日本語訳を示す。

東西古今を問わず「死者崇拜」は政治的正統性を確保する上で重要な要素だった。古代から王は、絶対的忠誠の対象とし「人格化(肉体化)した国家」だった。先史時代には、そのような王の死は世界の滅亡を意味した。そのため、老いた王が自然死する前に、彼を殺して若い王を掲げる提案が行われた。「黄金の枝」を書いたジョージ・フレイザーが言った「神聖な王の死」による「世界の救い」である。ほとんどの国から王が消えた近代以降の状況のもと、ハ・サンボクはそのような象徴政治の空間として国立墓地に焦点を当てた。国家と主権を表象する人格的(肉体的)存在として王が消えた近代国家の悩みは、忠誠と愛国の感覚的で具体的な代替物を捜し出すことであった。新しい主権者になった国民は、広範囲な対象や理性の自由、平等のような抽象的な理念だけでは、自発的かつ深層的な忠誠を引き出すことができなかった。

韓国の国立墓地であるソウル銅雀洞の国立顕忠院は、1948年の麗水・順天事件と1950年の韓国戦争の戦没将兵墓地として出発していた。当然、その土台には反共軍事主義という理念が敷かれていた。そうするうちに、民主化時期を経て3・15墓地・4・19墓地・5・18墓地など民主化関係者を追慕する国立墓地が相次いで誕生したのである。共同体に対する犠牲と忠誠を強調した国立顕忠院が初期のアメリカの国立墓地アーリントン(Arlington National Cemetery)に似ているとすれば、民主化墓地は不当な国家権力に対抗する自由と抵抗を強調するという点で初期のフランスのパンテオン(Le Panthéon)に似ている。このパンテオンはのちにフランスの偉人たちの遺体を祀る墓所・墓廟となった。政治的緊張が漂う二つの国立墓地が韓国人の胸に存在するのである。今回の翻訳は、韓国における「国立墓地と死者の政治」について状況を考える題材を日本語で提供することになろう。

### 2. 翻訳

国立墓地と死者の政治

2012年8月21日、セヌリ党の大統領候補の朴槿恵氏がソウル銅雀洞に位置する国立顕忠院を訪れた。李承晩・朴正熙・金大中元大統領が祀られた国家元帥墓域を参拝した後、「護国英霊の崇高な志を受け継ぎ、国民の大統合

\*大阪観光大学観光学部/韓国現代政治史

の新しい時代を切り開きます」と芳名録に書いた。そして、慶南の烽下村を訪れ、盧武鉉元大統領の墓地も参拝した。翌日の 17 日には民主統合党の大統領候補に選ばれた文在寅氏が、そしてその三日後の 20 日には無所属の安哲秀候補が、国立ソウル顕忠院を訪問した。

韓国の政治家は危機的状況や決断が必要なときには国立墓地を訪れる。中でもソウル顕忠院はそうした政治的行為が大衆に対し強くアピールする特別な空間である。黒い服を身にまとって顕忠塔に焼香した後、黙とうをささげる政治家の姿は非常に見慣れた風景だ。そうした点から 3 人の大統領候補による顕忠院の訪問と参拝はまた見慣れた、それ故にさほど目新しくない場面である。しかし、いくつかの点で彼らの政治的行為に注目する必要がある。

第一に、彼らが参拝した死者らが同じではないという点だ。李承晩・朴正熙・金大中の 3 人の元大統領を参拝した朴槿恵候補とは違って、文在寅候補は李承晩・朴正熙を通り過ぎて金大中元大統領の墓にだけ詣でた。ところで、顕忠塔に引き続き彼が先に参拝した墓域は、国家元帥墓域ではなく一般兵士墓域だった。ベトナム戦争で戦死した下士官の墓所に献花した「後」、金大中元大統領の墓地を訪れたのである。安哲秀候補も違った。彼は李承晩・朴正熙・金大中の墓所を「全部」参拝した。朴槿恵候補と行動を共にし、文在寅候補と距離を置いているように見えるが、学徒義勇軍無名勇士塔から始まり国家社会有功者墓地に安置された朴泰俊元総理に続き国家元帥墓域と一般兵士墓域まで続くかなり長い参拝儀礼を行い、権力者の墓にだけ参拝した朴槿恵の場合とは同じではない<sup>1</sup>。

第二に、三人の候補が同行させた側近の規模と顔ぶれ、メッセージも相当異なる。朴槿恵候補は、黄祐呂セヌリ党代表、李漢久院内代表など党指導部と前・現職議員 60 名を引き連れて参拝した。反面、文在寅候補の参拝は非常に素朴だった。彼は党内選挙選対委の秘書室長の尹厚徳議員とスポークスマンの陳善美議員だけを同行させており、顕忠塔の参拝後も「一人」で一般兵士墓域と国家元帥墓域を訪れた。文在寅候補は、芳名録に「人が優先の世の中をつくります」というメッセージを書いた。朴槿恵候補のメッセージが共同体レベルの価値を目指す理念であったのに対し、文在寅候補は全体に立ち向かう個別者や国家に立ち向かう個人の価値を優先する理念を示した。安哲秀無所属候補も朴仙淑共同選対本部長をはじめ少数の側近だけを連れて顕忠院を訪れた。国家元帥墓域への参拝を終えた安候補は、「大韓民国の新しい変化に向けて努力します」というメッセージを芳名録に書いた。彼が書いた「新しい変化」は、保守と進歩を代表する二人の大統領候補とは一線を画する「第三の道」への意志を表した政治言語と解釈される。

様々な部分で違うもしくは相互対立する「参拝の政治」は、各陣営において解釈の対立につながった。セヌリ党は、安哲秀候補に対し「新しい政治の実現」に向かっていて「朴槿恵候補が闡明した「国民大統合」と軌を同じくするという点で肯定的」だと評価した。反面、文在寅候補の参拝については、顕忠院の訪問の時、金大中元大統領の墓地だけを参拝し、李承晩・朴正熙元大統領の墓地を訪れず条件付参拝の意思を示した偏狭で偏屈な歴史認識を自ら露呈した<sup>2</sup>。安哲秀候補側は、「苦しく痛ましい歴史も我々の歴史」とし、「過去の歴史に正面から立ち向かいたく、前大統領の墓地を全部訪れた」と述べた。文候補はそういった批判をあらかじめ予見したかのように「権威主義体制を通じて国民に多くの苦痛を与え、人権を蹂躪した政治勢力が過去に対して心から反省をすれば、私が最初に朴正熙元大統領の墓地を参拝する」と立場を明確にした<sup>3</sup>。朴正熙元大統領を排除したのは、自分の明確な政治的所信という意味だ。

三人の政治的な意見の違いは、「10月26日」をきっかけに再び浮き彫りになる。その日は、朴正熙元大統領が暗殺された日であるとともに安重根義士が伊藤博文を暗殺した日という次元の違う政治的な時間だった。三人の候補はそれぞれ違うところを訪れた。朴槿恵氏は国立顕忠院で開かれた朴正熙元大統領追慕式に出席しており、文在寅

<sup>1</sup> 《韓国日報》2012年9月21日

<sup>2</sup> 《中央日報》2012年9月21日

<sup>3</sup> 《韓国日報》2012年9月21日

氏は孝昌公園の愛国志士墓地を訪れて、金九・安重根・尹奉吉義士の墓所を参拝した。そして、安哲秀氏は昌原の 3・15 民主墓地を参拝した。文在寅候補は親日清算の問題に触れながら歴史の正統性を確立するために努力しなかった過去を批判した。朴正熙元大統領もまた親日反民族行為者として認定された人物であるという点で、文在寅候補の歴史認識は決して過去の歴史に対する儀礼的な省察に属する性格のものではなかった。朴槿恵候補は、朴正熙をめぐる社会的な論争を意識しながらも父の統治期を、貧困を解決するための努力として正当化すると同時に「その過程で心の傷と被害をこうむった方々に心より謝罪します」と反省のメッセージを忘れなかった。相対的に安哲秀氏は、国家元帥の墓域の芳名録に書いたように政治論争から距離を置いたように見えた。3・15 民主墓地は、李承晩政権に起因する問題であるためだ。安哲秀氏は芳名録に「民主主義のために犠牲になられた方々の心、忘れません。新しい未来を切り開きます」という文章を残した<sup>4</sup>。

2011 年 8 月 6 日午前 11 時、全斗煥元大統領の警護室長を務めた安賢泰氏が国立大田顕忠院將軍第 2 墓域に埋葬された。彼は同年 6 月 25 日に亡くなったものの、すぐに安置されなかった。死亡後 40 日が経過して安置されたのは、安置の資格について合意に達しなかったためだ。彼は国家報勲処が安置を決めた翌日、急いで国立墓地に埋蔵された。しかし、埋蔵後も彼を改葬すべきだという声上がり、彼は死者としてのしかるべき待遇を受けることはなかった。

安賢泰氏は陸軍士官学校卒業後、首都警備司令部第 30 警備団長と空輸旅団長を務めた。1985 年 1 月、少将で転役して予備役に編入された後、その年から 1988 年まで大統領警護室長を務めた。「国立墓地の設置及び運営に関する法律」第 5 条（国立墓地別安置対象者）によると、国立ソウル顕忠院と国立大田顕忠院への安置資格として「将官級将校または 20 年以上軍務に服した人のうち転役・退役または免役された後死亡した人」を含めている。この場合、「将官級将校」は將軍を意味するので、少将で転役した安賢泰氏は、法律上国立墓地に安置される資格を確保したことになる。だが、法律では大韓民国の国籍を喪失した人や弾劾や懲戒処分により罷免や解任された人などは、国立墓地に安置されないと規定しているが、その禁止規定には「国家有功者等礼遇及び支援に関する法律第 79 条 1 項第 1 号から第 4 号までのいずれかに該当する者」が含まれている。法律第 79 条は、国家有功者の礼遇及び支援を受ける資格がない者として、国家保安法の違反行為によって実刑の宣告を受けその刑が確定した者をはじめ、「特定犯罪加重処罰等に関する法律」に違反し禁錮 1 年以上の実刑の宣告を受けその刑が確定した者を含めている。

こうした法律の基準に照らし合わせてみると、安賢泰氏は安置の資格を喪失する。全斗煥政権時代、秘密資金の調達にかかわった容疑で「特定犯罪加重処罰等に関する法律」（賄賂の收受及び幫助罪）により 1997 年に 2 年 6 月の実刑の宣告を受けたためだ。ところが「国立墓地の設置及び運営に関する法律」第 10 条は、安置対象者に対する安置の可否を審議するための「安置対象審議委員会」の設置と運営を定めている。そして「国立墓地の設置及び運営に関する法律施行令」は、審議委員会の審議事項を明示しているが、第 13 条（審議委員会の審議）第 3 項は「国立墓地の安置に関する申請を受けた国家報勲処長または国防部長官は、安置などの対象として申請された者が次の各号のいずれかに該当する場合には、審議委員会に審議を依頼」することができること明示している。「次の各号」のうち 3 号の内容だ。「禁錮 1 年以上の実刑の宣告を受けた場合及び、国家報勲処長と国防部長官が協議のうえ、定めるところにより法第 5 条第 4 項第 5 号に該当するかどうかに対する判断が必要と認められる場合」だ。「法第 5 条第 4 項第 5 号」は国立墓地の栄養性の毀損に関する規定である。

遺族が国立大田顕忠院への安置を申請した安賢泰氏は、1 年以上の実刑の宣告を受けたものの、彼の安置が国立墓地の栄養性を損なうかについて判断するため審議委員会における審議の対象となりうる。安置の申請を受け付けた国立大田顕忠院は、2011 年 6 月 30 日に国立墓地安置対象審議委員会に対し審議を依頼した。国立墓地の設置及び運営に関する法律施行令第 8 条により構成された審議委員会は、2011 年 7 月 8 日と 7 月 29 日の 2 回にわたり会議

<sup>4</sup> 《メディアニュース》2012 年 10 月 26 日

を開き、安賢泰氏の国立墓地の安置を許可するかどうかについて審議したが、委員間に意見の相違があったため、意見をまとめることができなかった。議決が保留された状況の中、審議委員会は「会議に付する案件の内容が軽微な場合、または会議を招集する時間的な余裕が場合には、書面をもって議決することができる」という施行令第9条に基づき同年8月4日に、書面審議を開催した。

2011年8月5日、国家報勲処は「国立墓地安置対象審議委員会が書類の審査を行って安氏を国立墓地の安置対象者として審議・議決した」と明らかにした。全体15名の審議委員のうち9名が表決に参加し政府委員6名と民間委員2名が賛成し、民間委員1名が反対しており、ほかに民間委員3名は書面審議に反発し辞退の意を示したと伝えられた。韓国メディアの報道をみると、安置決定の理由として次のような点が挙げられている。第一に1988年に特別復権されたこと、第二にベトナム戦争に派遣され国威を発揚したこと、第三に1968年の1・21事態の際に青瓦台(大統領府)を襲撃した武装スパイを射殺し、花郎武功勲章を授与されたこと、第四に大統領の警護室長を務め国家安保に貢献したことなどだ。また安置審議会議録の内容を伝えた報道によると、審議委員たちは「大統領の警護室長として犯した犯罪がなかったら、偉い軍人として残ったに違いない」という意見を示すことで安置を承認した<sup>5</sup>。

上記報道に照らし合わせてみると、安賢泰氏の安置を議決した審議委員会は、彼が国のために奉仕し、犠牲を払った「軍人」でありひいては「反共」を実践した軍人である点を重要な判断材料にしたものとみられる。「派遣」と「スパイ射殺」に表れる「偉い軍人」という点が安賢泰氏に対する審議委員会の主な評価だった。そのような国家的・理念的な経歴は、彼が特定犯罪加重処罰法により実刑の宣告を受けた事実より重要だったと解釈しても差し支えないと思われる<sup>6</sup>。

国家報勲処が安置の議決を発表すると、強い反対の声が上がった。5・18関連団体、民主化運動団体、民主党が動き出した。彼らは、全斗煥・盧泰愚など第五共和国の中心人物たちを国立墓地に安置するための準備手続きと判断し、安賢泰氏の安置撤回運動を展開していくと明らかにした<sup>7</sup>。そして「1980年の民主化の要求を血で踏みにじった全斗煥政権の中核的人物であるとともに天文学的な金額の秘密資金を調達した責任者」は国立墓地にふさわしくないと述べた。また安賢泰氏の安置決定についての真相の調査と責任者の処罰、「軍事独裁時代の重大人権侵害事件、国家暴力による人権侵害事件、権力型不正事件に関与し司法処分を受けた者の国立墓地への安置を禁ずる法律の制定」を求めた<sup>8</sup>。団体らは「(仮称)安賢泰など国立墓地安置反対国民委員会」の結成に合意しながら法律の制定、国民署名運動など数々の方法を通じ安置の無効に向けて努力すると明らかにした。

上述した二つの政治的な事件は、いずれも国立顕忠院という空間を舞台にしている。韓国多数の政治家は、顕忠院に眠る死者を呼び起こし彼らとコミュニケーションすることで自分の歴史観と政治哲学を大衆に伝えてきた。各自違う方式で死者を呼び起こした。彼らにとっては、必ず会うべき、そして会ってはならない死者がいた。会うべき死者と会う形式を選び、コミュニケーションの内容を決める高度の象徴政治が必要であった。彼らはなぜ大統領候補に選ばれた後、なぜ例外なく国立墓地で自分の政治的な存在性を示したのだろうか。参拝の政治が要される理由はどこにあるのだろうか。

ある個人の死に対しては、当然、追悼の礼が尽くされるべきだが、安賢泰氏はそうではなかった。もし国立墓地

<sup>5</sup> 《ハンギョレ》2012年9月20日

<sup>6</sup> 安賢泰氏の安置問題に関する国会政務委員会の場での朴勝椿国家報勲処長の発言は、その判断を支えている。「反面、軍関連7つの団体は、故・安賢泰將軍が国軍の特殊戦の戦力養成に大きく貢献した功労があり、1961年、金新朝らによる青瓦台襲撃未遂事件の時もこれを遮断し花郎武功勲章を授与されており、ベトナム戦争にも参戦した。また特定犯罪加重処罰法に違反した点についても斟酌しうる事情があり、収受した金員の大半を部下職員に充てた事情を鑑み、国立墓地の安置を建議する意見を提出しました。」「第310回国家(臨時国家)政務委員会議録第1号」、[www.namgu21.com/upload/assembly/310tb0001b.pdf](http://www.namgu21.com/upload/assembly/310tb0001b.pdf)。

<sup>7</sup> 《ハンギョレ》2011年8月5日

<sup>8</sup> 《ニューズワイヤ》2011年8月10日

への安置を望まなかったら、彼は深い悲しみに包まれこの世を去ることができただろう。問題は、彼の遺体を国家的な墓地に安置することにあつた。安賢泰氏の安置を支持する側は、彼が国立墓地に安置される資格があると考えたが、反対する側は、その資格を認めようとしなかった。彼の国立顕忠院の安置は、適切かどうか。2011年の夏に繰り広げられた「死者の政治」はその問いに対する国民的な合意が形成されていないことを示す。

国民から崇敬される愛国者が安置されており、絶対的な崇高さと神聖さの場にされるべき国立墓地がなぜ政治的な演出と葛藤の空間と化したのか。それは例外的な現象なのか、それとも普遍的な現象なのか。権力と政治を熱望する生者はなぜ死者に会い、対話しようとするのか。参拝の政治と死者の政治が求められる理由はどこにあるのか。

死者と生者が出会い、その死者をめぐる繰り広げる闘争は政治的意志と熱情が国家という舞台の上で動いてきた時間と同じくらい古い現象だ。ここで言いたいのは、「死の政治人類学」である。過去から現在に至るまでそして地球的な空間における洋の東西を問わず、死者と彼の眠る空間は、政治的な欲望が表出される最も重要な場として機能してきた。死は、人間の最も深層的な情念と感性を刺激するため、つねに政治の中心に立たざるを得なかった<sup>9</sup>。このことが、墓地が政治的な演出が展開される舞台として長い間、存在してきた理由であるわけである。また肉体の死滅に逆らって永遠な記憶の存在として残ろうとする存在論的な熱望は、人類が絶えずそして例外なく抱え続けてきた政治的な現象である。

我々は、「国民の墓地(national cemetery)」である国立墓地の政治をそのような人類学的な視点から検討することができる。だが、国立墓地が「近代」という特定の政治的な時間の中で企画され、誕生し、運動する制度的な空間であることを考慮すると、そこから生ずる政治的な対立は近代性の上で観察し、追跡しなければならない。では、「近代国家と死」の相関関係とは何か。近代国家の存在論的特殊性は死と政治のつながりを強く求めている。近代国家は、君主という政治的な人格体に土台を置いて動く伝統的な国家とは根本的に違う。近代国家には国家を表象する人格的な存在がなく、国民(nation)という抽象的かつ集団的人格に代表される。主権を表象する人格的な実体のない国家に対する愛国の心理を引き出すには、国民の存在と価値を感覚的に再現する作業が欠かせない。近代の国立墓地はそのような政治原理の帰結である。

他国と同様に韓国の国立墓地もまた特定の歴史事件と国家理念を基に誕生した。韓国における国立墓地は、1948年の麗水・順天事件と1950年の朝鮮戦争を背景に、その両「反共主義」事件で犠牲になった軍人と警察官を安置するために1956年に創設された。韓国の国立墓地(今の国立ソウル顕忠院)の本来の名称は、「国軍墓地」だったのはそのような歴史的な背景に由来する。韓国の国立墓地は、その創設以来「反共軍事主義」という理念を再生産する空間として機能してきた。そして愛国とはすなわち反共を实践した軍人および警察官という社会認識を形成した。反共主義を忠実に履行した軍警の場合、何の問題なく国立墓地に安置された。その結果、安置空間の不足は避けられなかった。朴正熙政権が大田に国立墓地の追加建設に乗り出した背景には、そのような必要性があったのだ。それ故に国立ソウル顕忠院と国立大田顕忠院は安置の原理と空間構成ならびに象徴の造形物などでそれほど大きく変わらない。だが、ソウル顕忠院の垂流という歴史認識は、大田顕忠院を権力の象徴政治からかけ離れた空間へ転換させた。反共軍事主義の凝縮された国立ソウル顕忠院は、李承晩、朴正熙という両権力者が埋蔵されたことで新しい政治的な運命を迎えた。権力を中心に厳格な位階秩序の空間として変化を遂げたのだ。これはソウル顕忠院で参拝の政治が日常的に演出される理由でもある。

国立顕忠院は、反共軍事主義を標榜する権力の空間として韓国の国立墓地としての絶対的な基準と地位を数十年間にわたって維持してきた。結局、国立墓地は反共軍事主義を体現した人物らが永眠する場所という認識が長い間時間を通じて定着するようになる。しかし1990年代以降、民主化が始まり民主墓地と呼ばれる新しい国立墓地(国立3・15民主墓地、国立4・19民主墓地、国立5・18民主墓地)が次々と建設されると、国立顕忠院はもはや唯一

<sup>9</sup> ラーダー、キム・ヒサン訳、《死者と権力》(作家精神、2004)。

の国立墓地の地位を失うことになった。歴史的な不可避性を持つその過程で韓国の国立墓地は、異なる二つのカテゴリーに分けられ、南-南葛藤と呼ばれる理念の対決にかかわることになる。

現代における韓国の国立墓地からみえる政治地形は、非常に複雑だ。2012 年大統領選挙の候補による参拝は、国立ソウル顕忠院の理念的な緊張と亀裂を示している。政治哲学と価値観を異にし、絶えず敵対性の中で共存してきた両前大統領、朴正熙と金大中元氏がともに永眠している矛盾を三人の政治家は正確に再現していた。文在寅候補は李承晩と朴正熙の墓地を参拝しなかった。現時点では、朴正熙を真の愛国者として認めないという歴史認識の発露である。しかし安哲秀氏は彼らを抱きこむべきだと述べた。朴槿恵候補と軌を一にするかのように見えるが、朴正熙政権を誇らしい歴史と見ていない点から決して同じ象徴性を持っていない。

国立大田顕忠院もまた、そのような論争から自由ではないことを安賢泰氏の安置をめぐる論争は物語っている。国立顕忠院で反共軍事主義の起源をみつきたい人々は、安賢泰氏の安置に一体どんな問題があるかと問い返すが、民主主義の空間として国立墓地を確立すべきと主張する側にとって安賢泰氏は国立墓地にまったくふさわしくない人物だ。そうした意味から彼らは民主墓地が真の国立墓地のモデルだと主張するが、韓国の保守主義層はその意見にまったく同意しない。

国立顕忠院と国立民主墓地では、相互和解しえない保守と進歩の対決が繰り返されている。我々は 2011 年と 2012 年の事例を見てきたが、死者をめぐる対決の政治はずっと昔までさかのぼることができる。2003 年のある民間人研究員の安置をめぐる論争と、2005 年における民族祝典の一環で企画された北朝鮮訪問団による国立顕忠院参拝事件、そして 2009 年の金大中前大統領の安置をめぐる対決の政治の対決などもまだそのような事例などである。

### 3. 付記

現在、韓国の政治で行われている「死者の政治」は、保守派のアイデンティティが根付いている国立顕忠院の理念的外壁を進歩派が揺さぶる様相だ。韓国の保守派は反共軍事主義に基づいた愛国主義、そしてその理念を体現する権力者の空間である国立顕忠院で自分たちの政治的アイデンティティを発見しており、そのアイデンティティを揺さぶる一切の政治的意図と行為を否定し攻撃している。逆に、韓国の進歩派は民主墓地が具現している歴史と価値の中で自分たちの政治的存在性を探しており、民族・自主の名のもとで国立顕忠院の制度と様相を批判している。2011 年の安賢泰の埋葬をめぐる一大対決が、その地点を明確に示している。

韓国の国立墓地がこうした統合の空間に変わってこそ、韓国政治の真の変化が実現できるとしている。「死の空間」が「共生の空間」に変わるとき、現実政治でも真の共存の政治が可能になるという洞察である。5・18 記念式典の時、「あなたのための行進曲」の提唱をめぐる繰り返された保守と進歩の「神経戦」を思い出してみると、「疎通と統合」の政治の出発点を「保守と進歩」を合わせた国立墓地の統合から探す逆発想が必要であると思われる。

#### 【引用・参考文献】

- 井出明 (2018) 『ダークツーリズム悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎新書  
井出明 (2021) 『悲劇の世界遺産 ダークツーリズムからみた世界』文藝春秋

#### 【原著注】

- 《韓国日報》2012 年 9 月 21 日 [韓国語]  
《中央日報》2012 年 9 月 21 日 [韓国語]  
《メディアニュース》2012 年 10 月 26 日 [韓国語]  
《ハンギョレ》2012 年 9 月 20 日 [韓国語]  
《ハンギョレ》2011 年 8 月 5 日 [韓国語]  
《ニュースワイヤ》2011 年 8 月 10 日 [韓国語]  
ラーダー、キム・ヒサン訳 (2004) 《死者と権力》作家精神 [韓国語]